

**日本医療秘書実務学会 第6回全国大会**  
**基調講演・研究発表の概要**

**【基調講演】**

講師：石黒直樹（名古屋大学医学部附属病院 病院長）

演題：社会保障制度から見える病院の将来像－社会構造の変化と医療の方向性－

**【研究発表】**（○印は主発表者）

発表 15分 質疑 5分

8月22日（土）16:00～17:00 座長：堀 初子（関西女子短期大学）

1	<p>○加集紀子（医療法人蜂友会はちや整形外科病院 秘書広報室）            谷智枝子（同 秘書広報室）            松下浩子（同 秘書広報室）            小島園子（同 診療情報部）            蜂谷裕道（同）</p> <p><b>医師の臨床研究サポートの取り組みと今後の課題</b></p> <p>当院は年間約 1200 件の手術を行う急性期の整形外科病院で、医師が高度な医療技術を提供するための一助として、2006 年より秘書室を設置し年間平均約 60 件の医師の学会発表・論文作成時のデータ収集および解析、抄録やスライド作成等の臨床研究サポートを行っている。今回本業務の内容を紹介するとともに、効果と今後の課題を報告する。</p>
2	<p>○横井美由紀（住友別子病院 医療相談支援センター）            和田美恵子（同）            越智 恵（同）            野村美貴（同）            合田夕華（同）</p> <p><b>当院における業務改善への取り組みと今後の展望            ～求められる医療秘書をめざして～</b></p> <p>当院の医療秘書の現状における評価から課題を抽出し、今後の取り組みを見出すためにこの研究を行った。医師へのアンケート調査から、知識不足や個々の能力の差などが課題としてあげられており、質の担保への取り組みが急務であることが明らかとなった。2 年前より業務改善やスキルアップに向けて取り組んでいる内容について報告し、その評価から今後の展望と期待できる効果について考察する。</p>
3	<p>○山本智子（川崎医療福祉大学 医療秘書学科）            宮原勅治（同）            田中伸代（同）            田村久美（同）            黒木由美（同）            佐藤麻衣（同）</p> <p><b>クリニカルセクレタリー養成プログラムの開発に関する研究</b></p>

	<p>「クリニカルセクレタリー」とは、診察室などの臨床現場で、医師と一緒に働く医療秘書職をさす。つまり、クリニカルセクレタリーとは、電子カルテ代行入力や診断書作成など医師の事務作業補助はもとより、チーム医療の中において「チームの段取りをマネジメント」する人材のことである。本学科では、2014年度から、これまでの医療秘書教育に加え、クリニカルセクレタリーの特別教育プログラムを開発し、国際標準プロジェクト・マネジメント手法のエッセンスを採り入れた人材育成を開始している。そこで、本研究では、このプログラムの中から、内容や指導方法を紹介し、その意義と課題について検討する。</p>
--	---

8月23日(日) 9:00~10:00 座長：河原 秀明(しげい病院)	
4	<p>○濱島由季(藤田保健衛生大学大学院) 米本倉基(藤田保健衛生大学)</p> <p><b>医師事務作業補助者に関する先行研究レビュー</b></p> <p>近年、医師事務作業補助者に関する研究が盛んに行われ、多くの論文が発表されているが、その研究は未だ網羅的に論文レビューされていない。本研究発表は、これまでで発表された医師事務作業補助者に関する先行論文を、医療秘書、医療クラーク等周辺職能まで含めてレビューし、何がどこまで明らかにされており、今後何を明らかにすべきかの示唆を報告するものである。</p>
5	<p>○柳野真佑(医療法人蜂友会はちや整形外科病院) 小島園子(同 クリニカルサポーター課)</p> <p><b>電子カルテ入力における医師事務作業補助者の設置効果の検証と人材育成の取り組み</b></p> <p>当院は、急性期の整形外科病院として内視鏡や低侵襲の手術を中心に行っている専門病院で、各コメディカルと医師が、チーム医療で高い医療を提供できるよう日々努力している。1996年からクリニカルサポーター課を設置し、2000年に電子カルテを導入したが、医師事務作業補助者が電子カルテ入力を行うことによる医師や他コメディカルに対しての設置効果の検証、電子カルテを使用した業務の効率化、人材育成の取り組みと課題について報告する。</p>
6	<p>○田中恵子(ミッション ウィル) 中村健壽(静岡県立大学名誉教授) 福岡欣治(川崎医療福祉大学)</p> <p><b>医事課職員における組織風土、情緒的サポートとバーンアウト、患者・家族対応との関連</b></p> <p>バーンアウトは、医事課職員の適切な患者接遇を阻害する組織的要因と考えられる。そこで、組織風土と情緒的サポートがバーンアウトに有効であるという先行研究から、その関連を検討した。13一般病院の医事課職員への無記名での郵送調査を実施した。</p>

	<p>216名のデータ（有効回答率 69.2%）を分析したところ、組織風土は情緒的サポートを高めることで、情緒的サポートはバーンアウトを軽減することで、間接的に患者・家族対応への意識を高めていることが示唆された。</p>
--	--

<p>8月23日（日）10:15～11:15 座長：小川 昌代（勝川医院）</p>	
---	--

<p>7</p>	<p>○小椋陽子（小阪田医院）</p> <p><b>クリニックにおけるクラークの役割・業務 ～地域連携に着目して～</b></p> <p>当院は岡山県の北部に位置し総人口 10,978 人の町の無床診療所である。医師 1 名、放射線 技師 1 名、看護師 4 名、社会福祉士 1 名、医療秘書 1 名、医事 3 名の 11 名で主に循環器、消化器を中心とした内科診療を行っている。通院患者の 7 割が 65 才以上で、後期高齢者が 4 割を超えている。重症患者も多く県北部の機関病院や県南部の専門施設との連携をとっているため、他の医療機関へ患者を紹介する機会が多い。医師の通常外来診療に支障が出ないように、緊急時、通常時の紹介を問わず、他の医療機関との連携を円滑に行うことが、診療補助業務に求められる。今回私たちは、専門的な医療機関との地域連携を迅速かつ円滑にするため、補助業務改善の試みを行ったので報告する。</p>
<p>8</p>	<p>○大塚 映（東京経営短期大学）</p> <p><b>対応業務におけるリスクマネージャーの役割と機能の実態調査報告</b></p> <p>医療機関が様々な医療安全管理システムの構築に取り組む中で大きな役割と機能を果たす医療安全管理者・リスクマネージャーの患者相談・クレーム対応・紛争解決等の対応業務における資質や能力、問題点、今後の課題等について、全国 400 床以上の一般医療機関の医療安全管理担当者へ実施したアンケート調査の結果を報告する。</p>
<p>9</p>	<p>○小林利彦（浜松医科大学医学部附属病院 医療福祉支援センター）</p> <p><b>医療クラークの生涯教育システム確立に向けた試み －静岡県からの発信－</b></p> <p>医療クラーク等の生涯教育システムは確立していない。静岡県では、県医師会の事業として、「静岡県の医療クラークを育てる会」を新設した。2014 年度は、グループワークや講演等を中心に、延べ 130 人ほどの参加者を得た。2015 年度も年 3-4 回の開催を予定している。教育プログラムとしては、医療安全、感染対策、個人情報、保険診療など、メディカルスタッフとして役立つ内容を網羅させ、研修項目毎に修了記録を残すようにしている。</p>

10	<p>○竹下喜代美(国立病院機構熊本医療センター 統括診療部)                  片渕 茂(同 副院長)                  園田美樹(同 総合情報センター部)                  山下直美(同 統括診療部)                  宮本雅子(同 統括診療部)                  原 向見(同 統括診療部)                  渡邊健次郎(同 精神科)</p> <p><b>医師事務作業補助者が長期勤務するために必要な能力</b></p> <p>当院は、医師の事務負担軽減のため医師事務作業補助者(以下ドクター秘書)を導入し、現在24診療科に44名のドクター秘書を配属しているが離職者も少なくない。ドクター秘書として長期勤務するために必要な能力や性格について検討し、長期勤務できた理由、必要な能力、実践しているコツなどについて調査した。他職種との連携や人間関係の難しさなどを改善し、職場環境を充実させることで今後の離職者防止につなげたい。</p>
11	<p>○野田真喜子(名古屋大学附属病院 医療業務支援課)                  橋本直純(同 呼吸器内科 講師)                  長谷川好規(同 呼吸器内科教授 副病院長)</p> <p><b>クランク検討ワーキングからの報告</b>  <b>－医師の負担を軽減するためのクランク業務への提案－</b></p> <p>当院では、クランク業務の中央集約化という方針に基づき、複数診療科対応クランクデスク(内科と一部を除く)と外科専従クランクデスクを2カ所に設置し業務を集約化し、少数のクランクを複数医師が共同利用して効率よく活用できるような仕組みを模索している。平成26年度、外来医長会議という外来の問題を話し合う会議が正式発足したことで、外来の問題の検討が始まった。その流れでクランク検討ワーキングも立ち上がり、内科外来の問題を洗い出し、内科での予約外初診患者の対応にクランクを活用する方法を提案した。現在その試験運用をするべく準備をしている。</p>
12	<p>○片田桃子(和歌山信愛女子短期大学)</p> <p><b>医師事務作業補助者に業務内容と必要な知識</b>  <b>－特定機能病院における実態調査から－</b></p> <p>特定機能病院では医師事務作業補助者の導入が診療報酬上認められていない。しかし、特定機能病院においても、医師事務作業補助者と同様な職種が雇用されている。このことから、特定機能病院における医師事務作業補助者に関する実態調査を2013年10月から同年11月にかけて特定機能病院における医師事務作業補助者に関する実態調査を試みた。本報告では、医師事務作業補助者に業務内容と必要な知識について、特定機能病院での現状を明らかにし、2010年に行った医師事務作業補助者に関する実態調査と比較検討を行った。</p>